

現代を生きる短歌の世界

歌人（現代短歌）

内山 晶太

はじめに、

私は 1977 年生まれ、1992 年 15 歳の高校生の時から短歌を作っています。最初は雑誌の投稿欄に投稿していました。例えば『月刊カドカワ』『週刊小説』、こういった雑誌には当時は俳句と短歌と詩のコーナーがありまして、最初の詩の投稿はうまく行かず、その後短歌を投稿したら佳作で取ってもらい、そこから短歌にどんだんのめり込んで行ったことがきっかけになっています。

大学生の時に短歌現代新人賞に応募しました。30 首まとめて一つという、30 首連作の賞だったのですが、こちらで賞をいただきました。それまでは、雑誌の投稿コーナーに投稿する、運が良ければ載せてもらえる形だったのですが、短歌には新人賞が 4 つか 5 つありまして、だいたいはそれを取ると歌人としてのスタートが切りやすくなるといったところですが、この賞を貰ってから少しずつ商業誌の依頼を貰い始めまして雑誌に発表する活動が増えて来ました。

短歌の世界は歌集が名刺代わりと言われていています。自分の短歌を集めた本一冊を出さないと名刺が無い状態とよく言われています。実際のところ、歌集というものは商業出版で出してくれるところはほぼない世界です。新人賞を取った人でも、自分でコツコツ一冊の出版代金で 100 万円単位のお金をためて、自腹を切って本を作って世に問うということをしなないとなかなか人目に触れないという厳しいところがあります。私もすぐに歌集を出せませんでした。

私の世代が就職氷河期世代とかロス・ジェネレーションと呼ばれる世代でして、就職の厳しい時がありました。30 代前半ぐらいまではアルバイトをしたり派遣社員としてコールセンターで働いたり、正社員として働いていた時期もありますが、その都度その都度じぶんに出来る仕事を探しながら暮らしてゆくような状態で、歌集を出すところまですぐには行きませんでした。30 代中盤ぐらいからようやく落ち着いて、2012 年に『窓、その他』という歌集を出しました。ようやく歌人として活動がある程度認められるところまで来たのはつい最近のことです。

短歌だけで生活している人はほぼゼロです。俵万智さんが『サラダ記念日』という歌集を 30 年前に出しまして、それが 280 万部出ているらしいです。それぐらいのことが無いとなかなか短歌だけで食べて行くのは難しいというところですが、俳句ですと、主宰を会員や仲間の人が支えて行くことで食べて行く仕組みが出来ているらしいのですが、短歌は基本的にボランティア活動です。私もグループに所属はしているのですが、その人たちは皆手弁当で、自分で交通費も負担しながら皆で協力して雑誌を作って行くというところですが、経済的には厳しい人も多いと思います。

私は現在新宿で会社員として働いております。サラリーマンをやりながら夕方仕事を終えて家に帰って、それから短歌の仕事があればその仕事をしています。短歌の仕事というのは、私の所属する短歌の結社、「短歌人」という会がありましてそこで編集委員の仕事をやっています。会の運営全般に関わり、会員の人の歌を見たり、企画を立てたりしています。商業雑誌から依頼があれば作品とか書評を書いたり時評を書いたりしますが、作品を作るよりはむしろ人が作った作品を読んで評する仕事の方が圧倒的に多いです。あとは、短歌教室を月一回、今杉並で日曜日にやっています。そこで皆さんに短歌を教えたり、あとはたまにこうやって講演をしたりすることがあります。従って完全に二足の草鞋です。昼はサラリーマン、夜は短歌、休みの日も短歌です。他の余暇の時間をうまく使ってゆきたいと思っています。

私にとっての短歌とは、生活のための仕事でもないし、趣味でもありません。難しい位置づけですが、それでも自分の基盤になっているものです。自分の一生をかけて付き合っていく創作活動、「ライフワーク」という言葉がしっくりくると思います。

今回は現代の短歌ということで、現代短歌というのは戦後の短歌から全て現代短歌と基本的に呼ばれておりますが、まずその中でも一番新しい、最前線の人たちの作品をご紹介します。短歌的な短歌には見えないかと思えます。こういう歌をどうやって作っているのか、また読んでいるのかということをお話しします。まず、作品の鑑賞を一つずつします。

■短歌の現在

新しい朝が来たけど僕たちは昨日と同じ体操をする

木下龍也『つむじ風、ここにいます』

最初の歌です。木下龍也さんの『つむじ風、ここにいます』という歌集の中の一首です。木下さんは30代の新鋭歌人です。短歌というとなんとなく、着物を着て、短冊に筆でさらさらと書く雅な文芸というイメージがありますが、私とか同年代以下の人は基本的に普段着でスマートフォンとかパソコンに言葉を打ち込んだりしています。木下さんの作品は、口語文体と呼ばれますが日常の言葉を使って、仮名遣いも今普通に使われている新仮名遣いで作品を作っています。

歌の解釈は、「新しい希望に満ちた朝が来た、だけど僕たちのやっていることは昨日と同じことなんだ」と、そこにある未来に対する疑いとか、諦め、諦念というものを、私はこの歌から読み取ります。希望にはついて行けない一人の人間がこの歌から見えて来ます。

木下龍也さんは、もともとはコピーライターを志望していた方の方です。非常に言葉の取り合わせが巧みです。「新しい朝」というのは単なる新しい朝では無く、ラジオ体操の歌詞の一節をダブルミーニングで含んでいるので、「昨日と同じ体操をする」の言葉がすんなり歌に馴染んできます。その辺の巧みさは若い世代でも頭一つ抜けています。一回読んで、なるほどと納得させる力も非常に強く、だれもが納得できてしまう歌を作るのが木下さんの特徴だと思います。

陽をあはく負ふ猫柳 さし伸ぶるふたたびは手袋をはづして

小原奈実「歌集未収録作品」

小原さんは木下さんより若い人でしてまだ20代の歌人の方です。ですが、木下さんの歌と比較すると大分老成している感じを受けるかも知れません。こちらは書き言葉の文語、旧仮名遣いで歌を作っています。「手袋をはづして」「陽をあはく」「負ふ」、新仮名遣いではそれぞれ「手袋はずして」「陽をあわく」「負う」となります。小原さんのこの歌で非常に特徴的だと私が思うのは「負ふ」という動詞です。光の中にネコヤナギがある情景ですが、例えば「負う」に似た言葉では、「(陽を)浴びる」とか「(陽を)受ける」だとかいろんな選択肢がある中で「(陽をあわく)負う」という言葉を選んでいます。なぜこの言葉を選んだのか考えてみますと、ネコヤナギの毛が付いたふくふくした感じの芽に光が当たって「浴びる」とか「受ける」よりも、「負う」の方が陽の光がそこに纏われているイメージを引き連れてくるのかなと思います。

下の句ですが、一度目は手袋をしたまま、二度目は手袋を外してネコヤナギに触れてみました、そういう歌なのです。手袋越しのネコヤナギの感触と素手で触れた時の感触、そこに必ず差異が現れます。その差異が含むしつとりと流れる時間の感じでしょうか。自分の感情は一切言っていない。ただ単に手袋で触って、手袋を外して触りました。それだけの事ですが、そこにしつとりした時間の流れが含まれている。その含まれたものを鑑賞するのが短歌の一つの醍醐味になります。短歌と言うと、自分の気持ちを強く訴えるような与謝野晶子とか近代短歌のイメージがあるのですが、現代短歌ですと大事なことは最後まで書かないのが主流であり一つのやり方です。大事なことは書かないで、書かないことによって生まれる膨らみで持って伝えると言いますか。ネコヤナギに再び素手で触って見たら堅かったとか、「堅かったとか」そういうことは言わずにただ単に行為だけを伝えて相手に感じさせる。それが現代短歌の一つのやり方になっています。

リクナビをマンガ喫茶で見ているらさらさらと降りだす夜の雨

永井祐『日本の中でたのしく暮らす』

これが短歌なのかという意見を持つ方もいるだろうと思います。日記的で、何でもない日常の光景です。リクナビというのは転職サイトです。漫画を読んで時間を潰せるのがマンガ喫茶です。おそらく雨は見えていない、音で雨を感じているので「さらさら」という言葉が先に来ている。夜の暗い窓の外に雨は降っているけれどもおそらくそれは見えていない、音で雨を感じている。という歌です。なんでもない歌と言ってしまえばそうですが、例えば「リクナビをマンガ喫茶で見ている」、その作中の中の主体というのは今から見れば非常に時代を反映していると思います。マンガ喫茶で夜を明かして暮らすような人も少し前にはかなりたくさん居ました。そういう人たちを連想させる環境です。

この歌のスタンスというのは、世界の大部分はドラマチックな出来事とか分かりやすい喜怒哀楽では無く、何でもなさで出来ている、というスタンスです。自分たちが生きている日常の世界というのは基本的には何でもないことが連綿と連なって出来ている。何でもないことを読んでいるからこそ、逆に時代というものがこの歌から滲み出てきているなど私は思っています。

短歌というのは情景をドラマチックに描かかせようとするところがあります。57577の定型が引力をもって、普通だったら「桜が散っている」というところを歌にしようとする「桜舞い散る」になってしまう。別に舞ってもいない、普通に散っているだけなのに、短歌で表わそうとすると「桜舞い散る」に、なにか華やかに、ドラマチックにしてしまう。そういう引力がこの57577の定型にあるのです。永井祐さんの作品は、そういう引力を知りながら、そこに敢えて乗らないというか、飾り立てた歌では無く、自分と等身大のポジションから常に歌を詠んで行く。これも一つの作家のスタンスとしておもしろいと思います。

サラリーマン向きではないと思ひをりみーんな思ひをり赤い月見て

田村元『北二十二条西七丁目』

これはとても分かりやすい、共感されやすい歌じゃないかなと思います。田村さんは、私と全く同じ年の1977年生まれでして、一時期は勤め先が同じビルの中だったこともあり、結構親しくさせていただいている歌人です。ここにも、サラリーマンの悲哀というか、諦めの気持ちがちょっと感じ取れるかなと思います。皆確かに、自分はサラリーマン向きじゃないな、一発起業して自営業でやった方がいいんじゃないとか、公務員の方が良かったんじゃないとか、いろいろ思ったりもすると思います。その皆が思っていることをそのまま一首にしています。最後に、赤い月という情景を少し添わせています。普通は月は黄色いのですが、この時は赤く見えたのかそれとも何かの象徴なのかというところは読者がそれぞれ読み解くところかと思えます。

田村さんのこの作品は、サラリーマンの悲哀とか諦念だけでなく、愛嬌があります。「みーんな」の言い方ですが、「みな思ひをり」ではなく「みーんな思ひをり」です。この辺に愛嬌があることも、優しさといいますか、もしかしたら達観しているのかも知れません。ただ、そこには他人に対する洞察力、みなそう思ってますよね、といった気持ちが良く出ていて、自然と読者に寄り添ってくる作品ではないでしょうか。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

俵万智『サラダ記念日』

31年前にでた歌集の中の一首です。前の四首と比べると明るい、手放しの明るさと言いますか、屈託のなさが分かると思います。歌というものは、特にその時代を詠もうと思わなくても自然に時代がにじみ出てきてしまうところがあるのではないかと思います。『サラダ記念日』が出た当時はバブル経済のバブルがはじける前の日本が一番浮かれていた時代なのかもしれません。その時代だからこういう歌が出てきて皆に受け入れられたのかも知れません。前の四首はちょっとうつむき加減、下目線、ちょっと諦めも入っていて、なんか疲れたなあ、皆頑張ろうや、そういう匂いを感じただけだと思います。まさに、バブルが崩壊して就職氷河期があつて、少し前にリーマンショックがあつて、日本の景気が落ち込んでいるのを目の当たりにしている人たちの歌というのがこういう状態。経済だけに結び付けて語るのもあまり良くないことだとは思いますが、経済だけを見てもなにかしら時代の影

響というものはそれぞれ引き受けて、それがこういった形で短歌に反映してくることをお伝えできればと思って紹介しました。これが今の最先端の作品たちです。

■定型というもの

短歌は5 7 5 7 7の31文字で作られるもの。一方で、5 7 5で作る俳句があります。俳句には季語が基本的に必要ですが、短歌には季語はいりません。短歌は5 7 5 7 7に沿っている定型であることだけが唯一の約束事です。それ以外は約束事が無い世界で、非常に緩いルールの中で皆がやりたいようにやっています。俳句は、季語があって、季節ごとの言葉があって、秋の言葉と夏を言葉と一緒にしてはいけないとか厳しいルールが定められていますが、短歌は何もありません。とりあえず、5 7 5 7 7に当てはめれば、皆がそれは短歌と認めてくれるある意味優しい世界です。ただ、文字数が31文字と、小説とか詩と比べると極端に少ない情報量で何かを表現して読み手に感じ取ってもらわねばならない、かなりハードル自体は高い世界ではないかなと思います。その限られた文字数の中で、いろんなリズムの使い方があります。今回は特にリズムと定型というところで歌をもとに話します。

硝子屑硝子に還る火の中に一しづくストラヴィンスキーの血

塚本邦雄『緑色研究』

まず一首目、塚本邦雄の歌。いきなり硬質な叙情と言いますか、難しい歌が出て来ました。この歌人は前衛短歌運動を引っ張って行った人です。前衛短歌運動というのはそれまで伝統的な短歌が持っていたじめっとした叙情とかそういったものからどうやって切り離して新しい短歌を作って行けるのか。歌人は戦争中に戦争協力の歌を作りました。斎藤茂吉とか名だたる当時の大御所というのが戦意を高揚させるような歌を新聞に発表したりして、戦後とたん叩かれるのです。現代詩とか文学の側から短歌というのはもうだめなんだと。例えば小野十三郎という詩人が発表した論文で「奴隷の韻律」というのがあります。短歌はデレデレとした湿った叙情がそれ自体だめで、私は生理的に受け付けないと短歌を猛烈に批判します。また、桑原武夫という文芸評論家の「第二芸術論」は主に俳句について批判した文章です。内容を端的に言うと、俳句は短いから複雑な趣向は入らない。これからの複雑な時代には対応できないので俳句はだめだと、という理屈です。俳句ほどではないにしろ短歌も非常に短いしかも伝統詩型であるということで、戦争が終わった後短歌は袋叩きみたいな状態にあります。そんななかで、塚本邦雄とか岡井隆、そういった人たちが中心になって前衛短歌運動、いままでの伝統的な短歌じゃないそこから切り離された短歌を目指して行こうという運動が始まります。そういう塚本邦雄の一首です。

この一首の特徴は、「硝子屑」で5音、「硝子に還る」が7音、「火の中に」は5音、「一滴ストラ」ここまでで8音、「ヴィンスキーの血」で7音。「一滴ストラ」で強引に切れ目が入ります。これを短歌では句またがりといいます。名刺なり単語が句をまたがって続いています。これを意識的に塚本邦雄は使って行きます。日本の叙情の湿り気というものを西洋的なカラッとした調べになんとかして近づこうという努力の一つとして、この句またがりです。今までの5 7 5 7 7のリズムとは違うものを作って行きました。伝統的な和歌とはだいぶリズムの作り方が違うのはお分かりいただけると思います。

歌の内容も難しい。上の句の光景は、集めた硝子くずが火の中で溶け合って一つの硝子として生まれ変わる。その中にストラヴィンスキーの血が一滴入っている。ストラヴィンスキーはロシアの前衛的な作品で知られる作曲家です。塚本邦雄はこのように非常に距離の離れたもの同士をぶつける二物衝突という手法をよく用いていました。元は俳句の手法らしいのですが、硝子とストラヴィンスキーの血、普通の会話では交じり合えないものが短歌の世界ではくっつけることもできます。そこに何が起るのか。

この歌の裏には、ストラヴィンスキーの作曲した有名な『火の鳥』があります。火の鳥は、死にそうになると自ら火の中に飛び込みそこから新しい命として蘇る、そういう不死鳥、フェニックスとイメージが繋がります。硝子も火の中に入って新しい命として蘇っています。このようにイメージを重ね、一面的な意味だけでは読み解けない複雑ないろんな仕掛けをしてゆくのがこの歌の特

徴で、その中にストラヴィンスキーの血という句またがりも入ってくるという、表面から見ると単に57577の31文字ですが、その裏には盛沢山の情報が詰め込まれています。それを読者がどう読み解くかというところでしょうか。

しかもなほ雨、ひとらみな十字架をうつしづかなる釘音きけり

塚本邦雄『水葬物語』

これも塚本邦雄の歌です。先ほどは句またがりという手法だったのですが、これは句割れという手法です。句割れというのは一つの句の中に二つの意味が入っているのです。本来「しかもなほ雨」で切れるのですが、57577で区切ろうとすると「しかもなほ」で一回切れる、そして「雨ひとらみな」の7音の中に二つの意味が入ってくる。「しかも雨、ひとびとはみな十字架をうつしづかなる釘音きけり」であれば57577の句通りに言葉が入っているのですが、「なほ」が入ったために「雨」が後ろに押し出されてしまった。こういう違和感を歌の中に、敢えて不協和音的なものをメロディーの中に入れてくるのが、塚本邦雄のやり方の一つで、これまでの短歌の叙情から離れようとする気持ちが非常に強くあったのだと思います。

小さなものを売る仕事をしたかった彼女は小さなものを売る仕事につき、それは宝石ではなく

フラワーしげる『ビットとデシベル』

これも短歌です。なぜ短歌かと言えば、本人が短歌として発表しているからです。それ以上ではありません。これはもう57577ではありません。塚本の歌はまだどこで区切ったらよいか分かったのですが、このフラワーしげるさんの歌はどこで切れているのか分かりません。フラワーしげるさんは小説を書いている方です。西崎憲さんという小説家です。この歌はおそらく、短歌の中に物語を入れようとした結果だと思います。とっても長い、どこで切れるのか分からないものが生まれてしまった。歌人の中にも、これが短歌なのか、という声がおそらく出るものと思います。ただ、短歌の定型は57577という何か箱みたいな入れ物を考えてしまうかと思いますが、私が思う定型は箱的な物では無く、もっと風船みたいな、言葉をどんどん入れることができるゴム状のものだと思っています。限界はどこか分かりませんが、かなり伸びます。あとは作者が短歌として発表したならそれは短歌でいいじゃないかと思います。31音よりはるかに多い字数で読まれている字余りの歌です。

なむ

南無といひしのきこゆ咲く萩の枝をくぐれる羽蟲のこゑ

森岡貞香『黛樹』

さっきの歌に比べるとなにか短いことが分かると思います。「南無と」これが初句です。2音足りません。こういう字の足りないものを字足らずと言います。字余りは伸びるのでまだいいのですが、字足らずはすごく難しいのです。うまくいっている作品は非常に少ないです。この森岡さんの歌は字足らずでうまくいっている作品だと思います。虫の羽ばたきの音、蚊だったらブーンとか、蝶だったらパタパタとか、いろいろありますが、森岡さんはその音を「南無」とたぶん聞き取ったのです。南無とは菩薩に向かって心からの帰依を表す言葉、南無阿弥陀仏の南無です。そういう言葉を虫から聞き取っている、そのおもしろさ。だからどうした、とは書かない。虫が南無と言いましたよ、どうですか皆さん。それだけの歌です。この歌を詠んだ人ははっとするのです。虫はブーンとかパタパタだと思っているから、まさか南無だとは思わない。でも確かに南無と言いそうだなと私なんかは思うのです。虫の声をそのように聞き取った森岡さんの感覚の鋭さとかそういうところは非常におもしろいと思います。この歌は、虫が南無と言ったという一瞬の出来事だったから字足らずにしたのだと思います。無理に5音にして「南無阿弥陀仏と言ひしのきこゆ」とやるとこれは嘘くさい。虫が南無阿弥陀仏とまで言うとはそれはちょっと難しい。無駄に言葉を合わせなかったところが、この歌の良かったところではないかと思います。これが字足らずという手法です。

ひまわりのアンダルシアはとほけれどとほけれどアンダルシアのひまわり

永井陽子『モーツァルトの電話帳』

「ひまわりの」が5音、「アンダルシアは」は7音、「とほけれど」が5音、「とほけれどアン」が句またがり、そして「ダルシアのひまわり」が字余り。この歌の面白さは定型の使い方です。言っているのは、「アンダルシアのひまわり」だけです。それが遠いと、それしか言っていないのですが、本当に遠い場所に一面にひまわりの黄色がめくるめく広がっているようなイメージが湧いてくると思いますが、短歌はどうしても理屈をつけたがる。なにになににして、なにになにになった。なにになにだから、なにになにだ、と。そういうふうにして、なんとかしてこの短い中に理屈をつけて収めようとする力が働いてくるのですが、永井さんはそれに乗らないのです。「とほけれど」が接続詞なので理屈の一部かも知れないのですが、言葉を循環させることで自然に発生してくるような理屈を発生させないやり方。また言葉を循環させることで、そこに永遠性みたいなものを発生させる、なにか呪文っぽいとも思いますが、日常ではおそらく何の役にも立たない言葉です。これをいきなり言われても、言葉を継げない、絶句してしまう。だからこそ、短歌として輝きを守っている。この循環によってアンダルシアへのあこがれが永遠にこの歌の中に閉じ込められている。そういう作品ではないかなと思います。

これまで形式の面から定型の句割れ、句またがり、字余り、字足らず、最後に永井さんの循環する一首をご紹介します。次は現代短歌の内容的なところを見て行きます。

■現代短歌の基盤（たった一人の私）

現代短歌の根底にはなにがあるのかというお話をします。現代短歌というのは基本的に現在もまだ近代短歌の延長線上にあると私は考えています。近代短歌は正岡子規から始まって、伊藤左千夫、斎藤茂吉、島木赤彦、土屋文明、佐藤佐太郎、彼らはアララギという巨大なグループに所属して、その流れの中に現れた歌人たちです。近代短歌はアララギの独壇場でした。確かに与謝野晶子とか石川啄木とか北原白秋とか佐々木信綱とか違う流れのグループも頑張っていたのですが、アララギが中心の時代が長く続きました。このアララギというグループが提唱していた短歌の作り方は写生とか写実と呼ばれるものです。変な観念を入れずに、自分が見たものをそのまま映せばそれが歌になるという方法です。これは正岡子規から始まっているのですが、分かりやすく誰にでもできるので結社が大きくなるためにも良くできた方法で、これがアララギの基盤にある考え方です。

物を見るのは目。その目は他でもないこの私の目。私以外の人の目で物を見ることはできない。言葉は他の人が使ったものを借りたりできますが、物を見るのはその人でなければできない。自分の目でしか自分の景色は見るのができない。アララギの写生という方法は今はそれほど主流では無いのですが、たった一人の自分が自分の目で物を見て歌を作ると言う主体意識とでもいうのでしょうか、これは現代短歌にも引き継がれていて、一人称の文学と言われたりもします。あなたがどうしたとか、かれがどうしたとか、田中さんがどうしたとか、そういうことでは無くて、私がどうしたのかということが短歌の基本なのです。短歌にはだいたい主語がありませんが、見えない「私」がそこに入っています。

昏れ方の電車より見き橋脚にうちあたり海へ帰りゆく水

田谷鋭『乳鏡』

おそらくは勤め帰りの川に差し掛かった電車の窓から川を見ている情景です。暮れ方なので川は暗くなっている。そこに水が流れていて、橋脚にぶつかりながら海へ出て行く。河口に近い川でしょう。勤め帰りということで、いろいろ忙しかったり、人間関係のごたごたとか、お客さんからのクレームとか、営業のノルマとか、いろいろあったのかも知れませんが、そういう人間の事情に関わらず川は安らかに流れている。橋脚に当たりながら海の方へ流れて行く。一日いろんなことがあって疲れたが、今は安らかな気持ちで帰りの電車から水の動きを見ている。一人の人間の眼差しが分かる歌です。

この歌には「見き」という言葉がありまして、「見る」に過去の助動詞の「き」が付いている、現代

語では「見た」ということです。主語はありません。誰が見たかは書いていませんが、短歌の世界ではこれを見たのは田谷鋭その人だという前提があります。それが他人では置き換えられないその人だけの事実というところに繋がって、それが歌の説得力になって行く。この辺が和歌とか川柳、標語、コピーライト、こういったところとはだいぶ違うと思います。川柳は自分が見たとかそういうことでは無く、みんなで共有できる言葉の面白さを捉えたり、コピーライトは商品の価値を高めて購買意欲をそそる言葉を選ぶのですが、短歌はそういうところとは全然違う一人の私というものを基盤において、その人が確かにこの景色を見たというその説得力で勝負して行くところが非常に強いです。

冬の日の眼に満つる海あるときは一つの波に海はかくるる

佐藤佐太郎『開冬』

佐藤佐太郎はアララギの代表的な歌人の一人です。この歌はかなり分かり易いと思います。冬の日に海に向かい合っている。波が立ち、海が隠された。海という途方もなく巨大な存在が波一つによって隠されてしまったことの驚き、発見。近いものは大きく見えて、後ろのものは小さく見える。遠近法の描写も歌にされると絵とはまた違った驚きがあります。波の勢いとその力強さ、海よりも波の方が力強いことがこの歌から大変よく感じられるのではないかと思います。「冬の日の眼に満つる海」と一人の人が海に向き合って海を見ていた時間があったということが歌の中に入っています。この辺が、一人の人が自分の眼で実際に見た景色なのだという強みを生かした作品ではないかと思えます。

通用門いでて岡井隆氏がおもむろにわれにもどる身ぶるい

岡井隆『土地よ、痛みを負え』

岡井隆さんは先ほどの塚本邦雄さんと同じ時期に登場した人で、前衛短歌運動に精力的に活動していた方です。岡井さんは大学病院に勤めていたかと思いますがお医者さんです。そこの通用門を出る時に、お医者さんの岡井先生が普通の私に変身するときの身震い、よしこれで日常の私に戻るぞ、という歌です。

たった一人の私にもいくつかの顔がある例です。仕事の先では、何々部長であったり、主任だったりする人も家に帰れば旦那さんだったり、実家に帰ればだれその息子さんだったり、いろんな関係性の中でその人は一面的では無く多面的な存在です。短歌もそこにはかなり意識を向けております。例えば次の歌のように。

ガス室の仕事の合ひ間公園のスワンを見せに行つたであらう

小池光『廃駅』

この歌はドイツのナチスの党員をテーマにした連作の中の一首ですので、ガス室と言うのはアウシュビッツですとかそういった場所を思い浮かべて読むことになります。職務としてガス室で殺戮を繰り返す人間がいます。その同じ人間が、家族のために公園に行って白鳥を見せたりする人間でもありました。

桑原武夫は複雑な趣向は短い詩形には入らないと短歌や俳句を批判しましたが、こういった形で人間存在の複雑さに今少しずつ短歌は迫りつつあります。やった行いは間違いなく悪い。ただその人が普段からそんな冷酷な人間だったのかというと、おそらくそうでは無い。家族のために休日公園に行って白鳥を見せてやる優しさを持った人間が一方では殺戮の一端を担ってしまっている。職務としてなにかをすることの倫理的な問題や人間の多面性ですとか、いろんなことが歌から言えると思います。言葉としては出て来ませんが、短歌にも言葉の裏に語るべき複雑な要素を詰め込むやり方があります。その一例として小池光さんの歌を挙げてみました。

■解釈について（誤解と正解）

短歌は非常に短い文字列ですので、省略や圧縮を使って57577に収めようとする。そうすると読者への依存が起こる。全部を丁寧に作者が書いてあげれば読者はそれをそのまま読み取ればよいの

ですが、短歌は省略したりするので、作者が省略した部分は読者にお任せするしかない。短歌の「読み」は、基本的には読者の数だけ正解があると私は思います。

するだろう ぼくをすてたるものがたりマシュマロくちにほおぼりながら

村木道彦『天啓』

この歌の解釈のポイントは誰が物語をするのかということです。二つの説があります。定説としては、恋人と別れました。あの娘は僕を振った物語をマシュマロを口にほおぼりながら気楽な感じで誰かとするんだろうな、とそういう解釈が定説です。もう一つは、昔の自分を捨てた物語を自分はマシュマロをくちにほおぼりながら、いつかするだろう。未来のいつかの話として解釈している。そういう読みがごく一部にあります。永田和宏さんという非常に著名な歌人の方がこの定説では無い解釈をされていて、その解釈をこの人もまた著名な吉川宏志さんという方に話したところ、吉川さんが「恋人が作者を棄てた歌じゃないですか」と言ったら、永田さんは「ええっ！」と声を上げて自分が読み間違えていることによりやく気づいたという文章があります。著名な読みなれた歌人でもこういう間違いは、表立っているのはこういう少ない例ですが、表立っていないのはかなりあるはずです。皆冷や汗をかきながら、他者の作品を読んでいくのです。

ふるさとに母を叱りてみたりけり極彩あはれ故郷の庭

小池光『廃駅』

この歌について、ベテランの歌人である岩田正さんの解釈は、「牧歌的な庭をゴテゴテと飾り立てたことに対する小池の違和感を歌にしている」、という詠み筋です。母親が自分の庭に青い椅子を置いたりとか、いろんなカラフルな装飾を施して庭を台無しにしたから母を叱った、という岩田さんの読みです。一方、小池さんが意図した歌の内容は、「みたりけり」で切れているということになります。小池さんは、「当時母は郷里の家にひとりで生活しており、こちらは、夏休みになると帰省することになるがいろいろ気の滅入る事情がある。いわゆる家庭の事情というやつで、いさかひのあげく、つまるところ「母を叱る」ようなことにもなる。激高して母を叱った後の眼には原色の夏の花はいかにもあわれである、という歌である。」と書いています。母を叱ったのは庭がカラフルだったからではなく、母を叱った後に庭を見たら庭の夏の花、例えばグラジオラスとか朝顔とかそういう花がきれいに咲いていて、何かそこに哀れを感じたという歌なのです。全く歌の内容、趣きが違ってきます。短歌の読みはどれだけ熟練した人でもうまく行かないときがあるという極端な例です。

海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり

寺山修司『空には本』

これは短歌の世界では物凄く有名な歌です。寺山修司の代表作といわれる歌ですが、歌の内容をちゃんと説明できる人はおそらくいません。「われは両手をひろげていたり」の解釈が三つあるのです。一つは、海の大きさをこんなに大きいと伝えている説。海を知らない少女が海はどれくらい大きいのかと「われ」に聞いてきたのかも知れません。その時に、こんなに大きいんだよと両手を広げて応えているという解釈です。次の説は、一緒に海に行こうと迎え入れている説。海を知らない少女と一緒に海に行くのに、「おいで」と両手を広げている光景です。最後は、「海に行っちゃだめ、止まって」と海の怖さを知らない少女の前に立ちどかっている説。どれも一理あります。「海に行っちゃだめ」は少数説ですが、力のある歌人が提唱している説です。私は、海はこんなに大きいんだよと伝えている説に近いです。

本当の意味は、掘れば掘るだけ分からなくなるというのが短歌の世界です。作者の意図を忠実に理解するのが読みの正解とも言えません。作者が思ってもいなかった読みをしてくれて歌が一層輝くこともあります。どういう読み手に読んでもらえるかでその歌の価値が変わってくるところが短歌には多くあります。言ってしまうえば、短歌には正解はありません。逆に言えば、正解がたくさんあります。とはいえ、あきらかな読み間違いもあります。歌が一番輝くような読みをしてあげることが、歌を読

むとときに一番大事なことです。歌を読んでいると自分の人生経験やら好き嫌いやらが読んでいる歌にどんどん反映されてきてしまいますが、その中でも歌が一番輝く読みを目指すことが、おそらく短歌の読みの正解に近づくのではないかと考えております。

ここまでは短歌の読みを中心にしてきましたが、次は短歌の作り方について少しをお話します。

■短歌の作り方

私も最初は指折りしながら作っていましたが、何年かすると定型が体に馴染んできます。そうするともう、歌を作ろうとするとだいたい57とか75とかそういう塊でやってくるのが今は多いです。最初の頃は、自分の気持ちを込めるのが短歌だと思って、言いたいことを歌に込めて十代の頃はやっていました。今は言いたいことは言わない方が多いです。大事なことは取っておく。取っておく膨らみによって相手に伝えて行くことが歌の作り方としては理にかなっているのではないかと、その方がたくさん情報を歌に含めることがおそらくできるからだと思います。歌を作るというのは自分の内側から言葉を出して行く、繋げて行く、組立てて行く、31音にする感じかも知れませんが、私の今の作り方は昆虫採集に近いです。ひらひらっと飛んできた蝶を網で捕まえる。自分から蝶を出すわけじゃなくて、外からやってきたものに対して自分はどうか反応できるか、向こうからひらひらやって来た言葉を逃さずに捕まえる。自分がやるのは捕まえることだけ、歌を作るときはそういう感覚が強くなっています。

定型というものは、57577で皆共通ですが、一人一人の体が違うようにその人の体に詠えられた定型が次第に出来て来ます。革靴が履いているうちに次第に自分だけの革靴になって行くような感覚です。初めは皆同じものが、使い込んで行くうちに自分だけのものになって行きます。そこまで行けたら歌人として幸せなことだと思います。

最後に三問、私の歌を使って穴埋めをやってみたいと思います。

列車より見ゆる民家の窓、他者の□□はいたく澄みとおりたり

内山晶太『窓、その他』

私は若いころに八千代台に長らく住んでいまして京成線をよく使っていました。町屋とか千住大橋とか下町の辺りでは民家がかなり近くにあって、勤め帰りには車窓からカーテンの空いた夜の民家の窓が見えてくる。正解は「食卓」です。本当に夜の家の明かりの透き通り方は非常にうつくしくて、下町なので建物自体は使い込まれていたかもしれませんが、そこにある窓から見える他人の食卓がこんなに綺麗なんだな、と非常に驚いたことがありまして、それを歌にしています。

わが死後の空の青さを思いつつ□□□□□の空しかしらず

自分が死んだ後の空を見ることはできない。そんなことを思っている時に、自分が知っている空はすべて誰かの死後の空なんだと思いついたときの作品で、答えは「誰かの死後」です。

冬の呼気透明となるまでを見て□□□一生のうちの数秒

内山晶太「歌集未収録作品」

冬、白い息を吐きます。すぐに透明になります。そのつかの間の時間であっても自分の一生の中の数秒なんだという感慨。正解は「くずす」です。お金を崩す、山を崩す、みたいに自分の限りある時間を取り崩しているという感じが伝わらうれしいです。

こういう感じで短歌というものが作られたり読まれたりしています。最近になりいろんな世代でかなり短歌への興味が出てきているようです。もしかしたら皆さんのお住いの近くにもカルチャーセンターとか短歌の勉強会みたいなものがあるかも知れませんが、ぜひこれをきっかけに現代短歌に興味を持っていただけたらと思います。本日はどうもありがとうございました。

[質疑応答、その他]

Q：先生がこの現代短歌をやっていて一番楽しいと思う事は何でしょうか？

A：自分が納得のできる短歌を作ることができた時は、数年に一回とかしか無いと思いますが、短歌をやっててよかったなと思います。自分が思った通りの歌や思いもよらなかった歌が出来た時はうれしいです。

Q：大家と言われるような人でも、名作と言われるものは一生のうちに 10 首あるかどうかと言われるようですが、先生の作られた中でこれと思うものをご紹介ください。

A：自分の歌が膨大にあって一つをなかなか選べないので、2012 年に出した第一歌集の巻頭歌、一番最初の歌をご紹介させていただきたいと思います。

たんぼぼの河原を胸にうつしとりしずかなる夜の自室をひらく

日常の光景、たんぼぼを河原で見た光景がなにかほかほかと夜になっても自分の中に残っていて、胸の辺りが照らされているような気持ちのまま自分の家に帰ってきて自室の扉を開けました、という歌です。個人的には大変思い入れのある作品です。

Q：穴埋めの最初の一首に私は「生活」を入れてみました。

列車より見ゆる民家の窓、他者の「生活」はいたく澄みとおりたり

正解は「食卓」とかなり具体的でしたが、具体的な言葉が良いのですか？

A：この歌には具体的な部分が今一つ無かったんですね。列車、見ゆる、民家、窓、他者の、と漠然とした言葉が続いてきたところで、入れるとすると「食卓」ぐらいのピンポイントな言葉を欲しかったのかな、と。当時を回想してそうと思いますが、意味としてはまさに「生活」です。自分は汚い部屋で暮らしているのに、他の人の生活はなんて綺麗で透き通っているのだろう、というぐらいのニュアンスを汲み取っていただければありがたいです。

Q：短歌と俳句の違いを教えてください。

A：確実に違うのは定型です。俳句は 5 7 5、短歌は 5 7 5 7 7、7 7 が付くかどうかが目に見える違いです。その他に、俳句はより場を大事にしている文学だと思います。季語だとか句会だとか。俳句の人はおそらくかなり頻繁に句会をやっていて共通のものを有効に使う文化がいまだに残っているのだと思います。短歌はその辺が個人主義で何かを共有してやって行こうとする意識はあまり持っていません。自由にやりたいことをやっている歌人と俳人の気質の違いがあるかと思います。

内山晶太（うちやま・しょうた）先生のプロフィール

1977年、千葉県八千代市生まれ。

1992年より作歌を始め、

1998年、第十三回短歌現代新人賞受賞。

2012年、第一歌集『窓、その他』を刊行。

翌2013年、同歌集で第五十七回現代歌人協会賞受賞。

結社誌「短歌人」編集委員。 同人誌「pool」「外出」同人。